

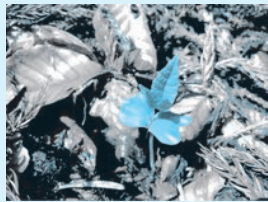
7月の暑い日、動植物調査のため盆堀の森に入りました。スギやヒノキが植林された山林を越えて、カスミザクラ、ヤマボウシ、ミズナラ、ヤマグリ、イヌブナ、モミ、ツガ、アカマツなど多様な樹種で構成された森に辿り着くと、足元に見覚えのあるものが。それはブナの殻斗（どんぐりを包んでいる殻）でした。驚きと喜びで思わず「ブナだ！」と声が出たのは、市内で確認されているブナは馬頭刈尾根に数本のみとされていたからです。周辺を探すと、幹に大きな裂け目がある直径約80cmの立派なブナを発見しました。

ブナは、北海道西部から九州の落葉広葉樹が優先する自然性の高い山地に自生する樹木です。名の由来は、風が吹くと葉がブーンと音を立てるので“ブン鳴りの木”がブナになったとか、水分を多く含む材は利用が難しいので“分が無い（割に合わない）木”が樫かきになったなど諸説あります。寿命は200～500年で、直径40cmになるのに約100年かかるとも言われています。

ブナの木の始まりは1粒のどんぐりです。4～7年に一度大豊作がありますが、全く実らない年もあります。実ったどんぐりの中で健全なものは半分程度で、その中で発芽するのはその半分程度とされています。どんぐりは、野生動物に人気があるため更に少なくなるでしょう。近くの大木が台風や寿命などで倒れて林床に光が入った時に、稚樹は急激に成長します。その後、野生動物の食害、雷、人間活動による伐採など様々な危機を乗り越えて大きな木になったと想像すると、このブナは暗い森でほのかに光っているような存在感がありました。

一方、ブナを発見した森を見てみると、林床はシカが植物を食べた痕跡とシカが食べない植物が目立っていました。また、優先する樹種であるミズナラは、市内の標高の高い山地でどんぐりが実る代表的な樹種です。しかし近年、コナラやミズナラなどが集団で枯れるナラ枯れが全国で広がっており、市内でも昨年まで丘陵地で確認していたナラ枯れは、今夏、標高の高い山地でも確認するようになってしまいました。多様な野生動物の命を支える自然性の高い森の姿は、近い将来変わってしまうかもしれません。これも自然の流れなのでしょうか…。

ブナを発見した喜びと同時に、森の未来を心配して複雑な気持ちになりましたが、秋にもう一度この森の状況を調査したいと思います。（加瀬澤）



昨年春、馬頭刈尾根で確認したブナの実生